

【 9 】

氏 名 (本 籍)	近 藤 明 子 (神奈川県)
学 位 の 種 類	教 育 学 博 士
学 位 記 番 号	博 甲 第 207 号
学 位 授 与 年 月 日	昭 和 59 年 3 月 24 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
審 査 研 究 科	心 身 障 害 学 研 究 科 心 身 障 害 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	自 閉 症 児 に お け る 概 念 学 習 の 障 害 に 関 す る 研 究
主 査	筑 波 大 学 教 授 教 育 学 博 士 小 林 重 雄
副 査	筑 波 大 学 教 授 医 学 博 士 長 畑 正 道
副 査	筑 波 大 学 助 教 授 吉 野 公 喜
副 査	筑 波 大 学 助 教 授 教 育 学 博 士 能 田 伸 彦
副 査	筑 波 大 学 助 教 授 杉 原 一 昭

論 文 の 要 旨

本研究は自閉症児の概念学習の困難性をとりあげたものである。この問題はこれまで追跡研究 (Rutter, 1967), 実践研究 (Frith, 1970; 太田, 1981), 心理検査に表われた特性 (太田, 1978; 大井, 1979) から指摘されてきた。しかし, それに対処するための指導法は確立していないのが現状であり, その理由として, この困難性についての問題の所在が明らかでないことが挙げられる。

概念が学習される過程における基礎的な機能は, 事物間の類似性を判断し, 共通属性を抽象することである (Bruner, et al, 1956; 清水, 1967; Rosch & Lloyd, 1978)。本研究では概念学習過程の基礎的なレベルである共通属性を抽出する能力について検討した。そして, 一般児の遂行レベルと照らし合わせながら, 自閉症児が有する問題を明らかにすることを目的とした。

① 第1実験系列 (実験1, 2)

概念形成過程において, 分類課題の手続き上の違いが, 属性を抽出する過程におよぼす影響と発達レベルの関連を検討した。

その結果, モデル刺激を用いた分類課題では精神年齢 (MA) が同レベルの自閉症児と一般児は同程度のパフォーマンスを示した。しかし, モデル刺激を用いない分類課題においては, 自閉症児は一般児と比較して, 課題の遂行が困難であった。すなわち, 複数の刺激から共通属性を即時的に判断し, カテゴリー化する過程における困難性が示唆された。そして, 課題の遂行は共通属

性が1属性の場合よりも、2属性の課題において一層困難となった。

② 第2実験系列(実験3, 4)

概念達成過程は、すでにある概念が存在することを知っている場合に、その概念に当てはまる物を他から区別する属性を発見する過程である(Bruner, et al., 1956)。この実験系列では概念達成の過程における自閉症児の特性を明らかにするため、新概念の習得過程において、共通属性を抽出する能力について検討した。

実験3ではMAおよび言語学習年齢(PLA)をマッチした自閉症児と一般児を対象として、概念を規定する過程について検討した。

実験4では、関連属性が2属性である材料を用いて、典型刺激と正誤のフィードバックから基準となる属性を抽出する過程について検討した。対象児はMAとPLAでマッチした自閉症児、一般児、精神遅滞児である。

結果として、自閉症児は概念を規定する属性の数が増加すると課題の遂行が困難になることが示された。また、一般児の遂行レベルを基準にした場合、自閉症児は注目できる属性の数がMAレベルに相応していないことが示された。そして、注目できる属性の数が増加しない原因を検討してみると、最初に注目した属性に固執するために基準の変換ができないことが明らかとなった。

③ 第3実験系列(実験5～8)

この実験系列では言語的材料を用いて、複数の事物に共通する属性を抽出する機能について検討した。

実験5では、色または形という知覚的属性を身近な事物から抽出する機能について、MAとPLAが同じレベルの自閉症児、精神遅滞児、一般児のパフォーマンスを比較検討した。結果は次のとおりであった。(i)自閉症児は同じMA、PLAレベルの一般児、精神遅滞児と比較して、言語的に提示された刺激から共通属性を抽出することが困難であった。(ii)自閉症児では絵カードを用いると、言語のみの刺激よりも共通点の抽出が容易となった。この結果は、記憶から必要な情報を検索し、その情報を使用することに困難さがあることを示唆するものであるとした。

実験6では実験5で問題となった。記憶から必要な情報を検索することにおける困難さが生じる条件を明らかにするために、共通属性の数の差異が属性を抽出する過程におよぼす影響について検討した。その結果、共通点が多く、関連する度合が密接なものは、検索される場合も共通点の発見が容易であることが示された。また、自閉症児は共通点が1属性である2語が提示された場合は一般児と同様の遂行レベルを示すことが明らかとなり、実験5で示された困難性は刺激語が多いために生じた問題であると考えられた。

実験7では自閉症児において共通属性の抽出が困難であることの原因を明らかにするために、事物とその事物を構成する属性の関連について検討することが必要であると考えられた。この実験ではproduction法(Nelson, 1974)を用いて、言語提示された事物名から、その事物を構成する属性を再生する反応について検討した。その結果、自閉症児が再生できる属性の量は一般児よりも少ないことが示され、その原因として、長期記憶内で項目を検索し、発見するという機能の

障害が示唆された。

実験8では、事物を構成する属性を再生する機能を検討した実験7に対応して、属性の名辞を提示し、その属性をもつ事物を再生する機能について検討した。その結果、属性を知ることができた場合に、その属性をもつ事物を再生する機能については自閉症児と一般児の間で差が認められなかった。

④ 自閉症児の概念の学習過程における問題

以上の結果から、事物から属性を抽出する過程における問題と、記憶から属性を検索して共通属性として同定する過程における問題が、自閉症児の概念学習の障害の基礎にあると考えられた。属性を抽出するという概念学習の基礎的なレベルにすでに問題があるならば概念の学習がスムーズに進行しないのは当然であるといえる。

上記の概念学習における問題点は本研究で主として対象としてきたMA6～7歳レベルの自閉症児においてのみ認められる問題でなく児童期を通じて残存し、特異な学習障害を形成していく原因ともなっていると考えられた。この問題を解決するためには早期の発達段階から計画的、積極的援助が必須の条件であること、そして、そこでの援助の内容および方法における留意点について提案を行っている。

審 査 の 要 旨

本研究は重度の精神遅滞を伴わず、比較的純粋な形で自閉症状が示されている自閉症児を対象として概念学習の障害を検討したものである。自閉症児の示す特異な学習障害の原因として彼らの概念学習の障害は指摘されてきた。しかし、いかなるレベルで、いかなる点に問題があるのかは分析的に解明されていなかった。その結果として、治療教育プログラムの中にこの問題の克服のための内容は積極的に組み立ててこなかった。

本研究は伝統的な手法である視覚刺激の分類課題から言語的情報の処理といった工夫された課題の利用により自閉症の認知障害説の実態に迫る結果を得たといえる。

ところで、本研究では対象児の選択の困難性にもよるが被験者数が統計処理可能な最低限にとどまっていること、得られた結果に基づく概念学習の困難性の克服のための早期からの働きかけについての提案が彼らの問題解決に真に効果的であるかどうかの吟味など検討されねばならない問題が残るといえる。

しかしながら、本研究は被験者の選択にあたっては複数の参考資料からの厳密なマッチングを行ったり、刺激提示を視覚的なものばかりでなく、言語的な刺激を用いるなどの工夫により自閉症児の特異な学習障害の本態に迫る結果を得ていることは自閉症研究とくに自閉症児の治療教育の分野での貢献が大であると判断される。

よって、著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。